『負け犬の遠吠え』と「イヤ汁」は二層に「仕掛け」られている
ーダーウィニアン社会学的分析・と・言説仕掛け（ディスクール・メカニックス）分析ー

041101 著作権保持
Yoshio SAKURAI
Sakurai.yoshio@nifty.com
http://homepage3.nifty.com/sakuraiyoshio/

桜井芳生

【要約】ベストセラー本『負け犬の遠吠え』を論じる。本稿の主張は、本書『負け犬の遠吠え』は「二層に仕掛けられている」というものである。すなわち、第一に、ダーウィン生物学的に、第二には、言説社会学的に。前者を補完する意味でわれわれ自身がおこなったアンケート結果を検討する。ジェンダー資本の豊かな者について認識利得のある発見を得た。後者にたいしてとくに注目したいのは、後者のメカニズムが、本書を読む読者＝当事者を「意固地」にさせてしまう危険性である。

＊　＊　＊

【本文ご高覧上の注意！（かならずお読みください）】

以下の行論からも明らかだとおもいますが、筆者（桜井）は、ある種の女性を、負け犬とおもったり、女性たるもの（男性たるもの）ある種のライフコースをすべからく取るべきだなどとまったくがんがえておりません。各人がどのようなライフコースをとるかはまったくご本人の自由・自己責任の問題で、なんらかの介入の意思はまったくありません。この点、誤解はありえないとおもいますが、あらかじめもうしあげます。

＊　＊　＊

【「負け犬」は、負け犬、か？】

冒頭にのべたとおり、筆者（桜井）は、「三十歳すぎ、未婚、子供なし、女性」をまったく負け犬であるとかんがえない。そしてまた、女であれ男であれ、ご本人がどのようなライフコースをとるかは、まったくもってご本人のかって・自己責任であって、他人がとやかくいう筋合いのものではない、とおもっている。

そのような私であるが、単行本『負け犬の遠吠え』が出版されるや非常に注目し、これをめぐる

日本社会の反応に関心をもってきた。それには理由がある。
　私が、ダーウィン生物学の成果を援用した社会学を試行している者であることがあげられる。ダーウィン生物学の視点からすると、生物（の個体）というものは、すべからく、みずからがよってたつ遺伝子の（拡大）再生産をめざすヴィークル（乗り物）である。しかるに、このような視点にたつと説明に窮する現象がいくつか目につくことになる。たとえば、その一つは、いうまでもなく、近年の日本社会についていえば、晩婚化・少子化の現象である。
　少子化は依然として、ダーウィニズムにとって難問のままであるが、この視点からして、本書『負け犬の遠吠え』の出現・ベストセラー化・話題化は非常に興味深い。
　まず、著者の酒井順子の記述（文言）を確認しておこう。お読みでないかたに往々にして誤解されるようだが、本書は、よくあるようなある境遇の人たち（この場合は、三十過ぎ、未婚、子供なし、女性）を、そうでない視点から「たたく」（バッシング）する本ではない。著者の酒井自身が、この境遇なのである。

「「既婚子持ち女に勝とうなどと思わず、とりあえず『負けました～』と、自らの弱さを認めた犬のようにお腹をみせておいた方が、生き易いのではなかろうか？」という意識から来る、一種の処世術と見ていただいてもいいでしょう。」（酒井 2003:8）

　晩婚化・少子化の（一方の）当事者である女性たちが、みずからがそうなってしまった境遇にたいして、まずは、「そのこと（結婚していないこと、子供をもたないこと）自体が、彼女らにとって、失敗であったかどうか」が問題となるだろう。そして、いうまでもなく、このような論争は決着がつかない不毛な論争になるだろう。

「負け犬と勝ち犬は、相手に欠けている部分を見つけては、お互いに「不完全だ」と言い合うのです。」（酒井 2003:10）
「この勝負、どちらかが折れないと永遠に決着がつかないであろうし、それはあまり良いことではないのではないか・・・・・と考え、私供負け犬はこの度、負けを認めることにいたしました」（酒井 2003:11）

　もちろん、同様な境遇にある女性のなかにも、みずからの「三十過ぎ、未婚、子なし」という境遇に平気なひとも少なくないかもしれない。しかし、本書がこれほど多くの注目をあつめたこと自体、同様な境遇にある日本女性の少なからずが、その境遇になんらかの悔いのようなものを感じていることを推測させる。そして、その抑圧されていたものを、「負け犬」というシンボルワードでもって白日下化したのが本書ではないだろうか？。

　本書には、「余はいかにして負け犬となりし乎」という章からはじまっていることからもわかるとおり、筆者（ならびに同様な境遇にある女性たち）が、目前のおもしろいこと・興味をひかれるこ

とを選択しているうちに、また、自分にふさわしいような異性がみつからずにいるうちに、年を経てしまい、非婚・子なしという境遇にある種の遺憾さをかんじるようになってしまうさまがよく描かれている。
ダーウィニストの視点からすると、出産がある程度むずかしくなった年齢になって、みずからの遺伝子再生産機械としてのいわば本能の呼び声に気づくひとが一定程度出現しつつある兆候として解釈することができるとおもわれる。
　このような一冊の本の出現のみだけで、日本の晩婚化・少子化のトレンドが逆転するといったことはありそうもないとおもう。しかし、全体を潮流全体をかえるほどではないにせよ、微細な「潮目」が少し晩婚化・少子化とは反対の方向にうごきつつある兆候かもしれない。

【ふたたび、注意！】

　このようなダーウィニストの視点で、議論を展開すると、ほとんどの場合、非常にのぞましくない誤解をされしまう。ので、おわかりのかたにはしつこいとおもわれるかとおもうが、注意しておきたい。

　１．まず、たとえ、上述の議論がただしかったとしても、ヒトの女性（メス）の全員にとって、出産・子育てをすることがその人の幸福の必要条件であると主張しているわけでは「まったくない」ということだ。上記はいわばマクロ的な傾向則であり、また、われわれ自身が、ヒトという遺伝子の再生産の末裔である以上、少なくともわれわれの直系の祖先は、出産・子育てを選好してきただろうし、それとおなじ遺伝子プールをもっているわれわれもマクロ的傾向としては同様であるだろうというにすぎない。当然、ミクロ的には例外はありうるし、例外的なヒトだからといってべつになんらかの欠陥・欠点をまったくいみしない。

　２．また、「事実」として大略上記のとおりだとしても、だからといって、「出産・子育て」をする「べき」であるという主張は導出されない。し、われわれも主張しない。主張するとしたら、それは周知の「自然主義的誤謬」の一種である。人間の本能がどうであれ、その本能どおりにいきるかいなかは、その当人の自由である。ただし、（他の条件を無視できるとすれば）その本能どおりにいきたほうが、その当人にとって満足度がたかくなることが蓋然的にはいえる場合は少なくないだろう。

　３．また、われわれは「晩婚化」「少子化」が「いい」とも「わるい」とも本稿では判断しない。

　４．以下、著者酒井の記述をふまえて、「三十過ぎ、未婚、子供なし、の女性」を、**カギカッコつきの「負け犬」とも表記する。が、これは、一種の約定上の省略記法であって、筆者（私桜井）が、これらのひとたちを負け犬と価値評価しているわけではまったくない。**

【「負け犬」をめぐるアンケート結果】

　かならずしも、「負け犬」をメインテーマとするものではないが、過日行った社会調査において、「負け犬」についての意識を聞く設問をいれてみた。結果は、予想したほどおおきな傾向はみいだせなかった。しかし、オムニバス（あいのり）調査のつねとして、予期していなかった設問（変数）との間に興味深い相関があらわれた。小規模なあくまでパイロット調査にしか値しない調査であるが、今後の探求のヒントとして紹介してすこし考察をくわえてみよう。

　まず、「負け犬」についての意識を聞く設問・回答枝は以下のとおりであった。

「ai みなさんにうかがいます。最近一部で、「30 歳すぎ、未婚、子どもなし、の女性」を、負け犬、と呼ぶひとがいるようですが（わたしたちではありません！！）、あなたは、どうおかんじになりますか。
6.まったく、そう（負け犬だとは)、思わない。　5.まあ、そう、思わない。　4.どちらかというと、そう、思わない。　3.どちらかというと、そう、思う。　2.まあ、そう、思う。　1.まったく、そう、思う。」

　上記のように「負け犬」の「否定」高い点数をつけていることに注意してほしい。したがって、これは変数としては「負け犬否定」と呼びうる。

　この調査は、2004 年 6 月九州のあるいわゆる地方国立大学でおこなった。文系学生の実習授業の一環として、学生が自分たちに知り合い（多くは学生）にまずは調査票を二通くばる。一通回答いただき（第一次回答)、もう一通はその回答者自身に別の方に配布し回答回収してもらう（第二次回答）（下記参照)。いわゆるスノーボール（雪だるま方式）調査（二段階だけだが）である。回答者（回収数）は第一次が 188 人、第二次が 160 人、計 348 人。いわゆるランダムサンプリングではない。

　まず、回答者全員のうちで女性のみを対象としての、設問「負け犬」と他のおもだった設問（変数）との相関係数（ケンドールのタウｂ）は以下のとおりである。上の概略でのべたとおり今回の調査は、まずは、学生さんたちを中心に回答いただき、その学生さんに、なるべく実の母などの社会人にもう一通アンケートをわたしてこたえていただくという二段階のスノーボール（雪だるま）調査であった。そうであるがゆえに、「負け犬」問題においては、「当事者」である「三十代女性」のサンプルはほとんどとれなかった。そのためもあってか、設問「負け犬」については他の変数とかけあわせてあまり大きな相関はみいだせなかった。しかし、それでもくわしくみてみるといくらか興味深いデータをみいだすことができる。以下をみてほしい。

相関係数

			ai負け犬	h年齢	qケータイ世界広	ar母職	bc虐待	bf虐待不安
Kendallのタウb	ai負け犬	相関係数	1.000	−.090*	−.109*	.135**	−.142**	−.125*
		有意確率（片側）	.	.041	.029	.010	.007	.014
		N	245	244	218	245	243	239
	h年齢	相関係数	−.090*	1.000	−.229**	−.065	.089*	−.173*
		有意確率（片側）	.041	.	.000	.103	.041	.000
		N	244	246	220	246	244	240
	qケータイ世界広	相関係数	−.109*	−.229**	1.000	.006	−.014	.065
		有意確率（片側）	.029	.000	.	.459	.406	.121
		N	218	220	220	220	218	215
	ar母職	相関係数	.135**	−.065	.006	1.000	−.065	.085
		有意確率（片側）	.010	.103	.459	.	.124	.064
		N	245	246	220	247	245	241
	bc虐待	相関係数	−.142**	.089*	−.014	−.065	1.000	.286*
		有意確率（片側）	.007	.041	.406	.124	.	.000
		N	243	244	218	245	245	239
	bf虐待不安	相関係数	−.125*	−.173**	.065	.085	.286**	1.000
		有意確率（片側）	.014	.000	.121	.064	.000	.
		N	239	240	215	241	239	241
	co年生	相関係数	−.136*	.750**	−.121	−.118	.160*	−.019
		有意確率（片側）	.048	.000	.056	.070	.024	.404
		N	119	121	121	121	120	119
	cp学部	相関係数	.205**	−.037	.078	−.207**	−.089	−.101
		有意確率（片側）	.009	.324	.165	.007	.145	.108
		N	114	116	116	116	115	114
	cw大学兄姉	相関係数	−.262**	.117	−.008	−.121	−.100	.043
		有意確率（片側）	.002	.078	.461	.079	.123	.303
		N	120	122	121	122	121	119
	dh大学重視	相関係数	−.194**	.060	.069	.035	.239**	.139*
		有意確率（片側）	.010	.220	.186	.330	.002	.038
		N	119	121	121	121	120	118

*. 相関は、5 % 水準で有意となります（片側）。

**. 相関は、1 % 水準でで有意となります（片側）。

まず、設問ｈ年齢との負の相関が注目される。設問 ai「負け犬」の「回答枝」は「そうおもわない」ほど高い点数をふってあったので、これはつまり「年齢が高くなるほど、「負け犬」とおもう」という傾向である。ただし、その傾向の強さは非常によわい。

つぎに設問ｑ「ケータイで世界が広がった」との負の相関が注目される。若年層もふくめた現代日本人のケータイ電話利用にかんしては、ケータイとリアル世界との交友・交流範囲はほとんどおなじであるというのが現在の大勢・定説であろう。しかし、「負け犬」とおもう女性たちは相対的に「ケ

ータイで世界広がった」とかんじているわけである。異性とのいわゆる「出会い（系)」あるいは広い意味での玉の輿願望があるひとたちとかんがえることができるかもしれない。この点今後の仮説構築・調査にむけてとても興味深い。

設問 ar「母親は仕事をもっていた」と正の相関である。自分の母親が職持ちであったならば、三十代で職をもち（その結果？）未婚の女性にたいしてもネガティブ評価をしにくくなるだろう。これは常識からも推測できる相関といえそうだ。

つぎに注目されるのが、設問 co「年生」である。つまり大学の学年である。負の相関。すなわち、学年が経るにつれて、「負け犬」と「思う」ようになるわけである。年を経ることで、とくに自身の出産機会が一年ごとに減少することにおうじて、「負け犬」の意識が若干進行していくのだろうか。

設問 cp「学部」との相関。じつはこの設問（変数）は名義変数なので相関係数は厳密にはナンセンスである。しかし、アンケート用紙の回答枝には「１．法文学部、２．教育学部（文系)、、、」と、文系に低い点数を、理系に高い点数をふってある。よって、上のように、「正の相関係数」がみいだされたということは「文系学部の女子学生ほど、「負け犬」と「思う」」という傾向を表している。

もっとも興味深いとおもわれるのが、設問 cw「学生のかたにのみうかがいます。あなたは、四年生大学に在学または卒業した兄・姉（弟・妹ではなくて！）がいますか」との相関である。この回答枝はじつは「はい、いいえ」の二択なので、はい、いいえ、ごとにグループとみなして、ｔ検定にかけてみた。以下が結果である。

T 検定

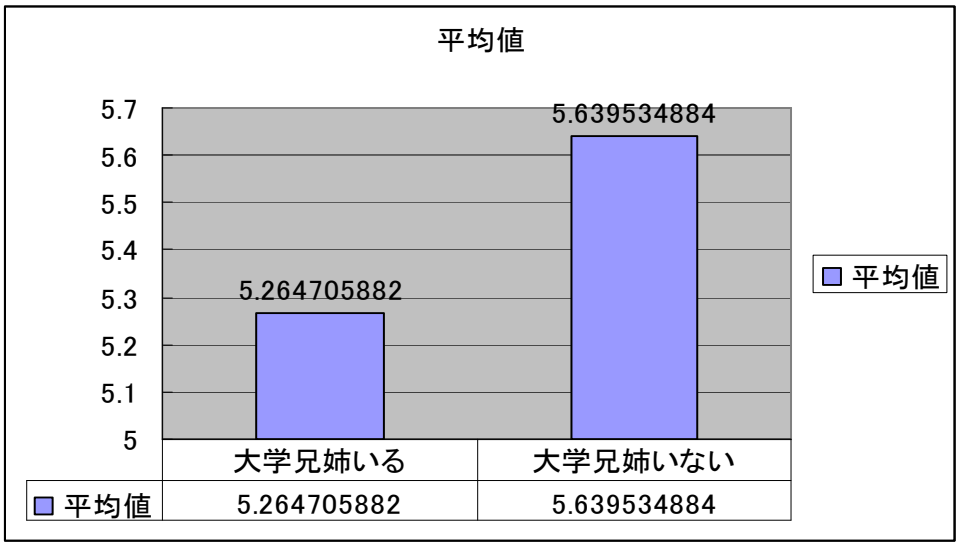
ｸﾞﾙｰﾌﾟ統計量

	cw大学兄姉	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
ai負け犬	4.00	34	5.2647	1.02422	.17565
	3.00	86	5.6395	.85285	.09197

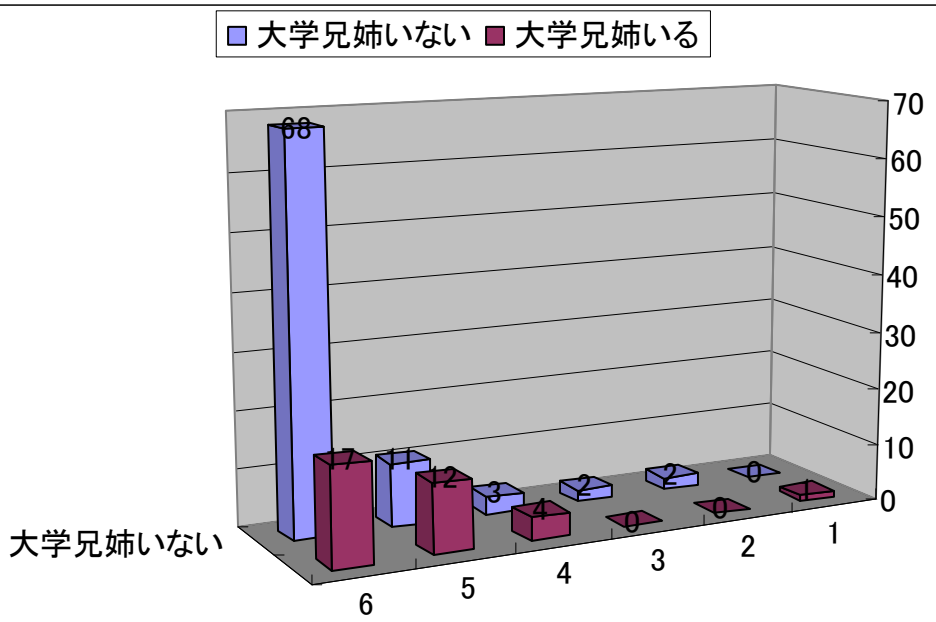
独立ｻﾝﾌﾟﾙの検定

		等分散性のための Levene の検定	2 つの母平均の差の検定

		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率（両側）	平均値の差	差の標準誤差
ai負け犬	等分散を仮定する。	1.567	.213	−2.047	118	.043	−.37483	.18315
	等分散を仮定しない。			−1.890	52.053	.064	−.37483	.19827



このように、大学兄姉がいるかいなかで有意な差がでている。
くわしく、クロス集計表でみていると以下のとおりとなる。



	1	2	3	4	5	6
大学兄姉いない	0	2	2	3	11	68
大学兄姉いる	1	0	0	4	12	17

上のグラフからみてとることができるように、大学兄姉がいようとも、「負け犬」とおもわない傾向にはかわりはないが、大学兄姉がいないひとは、「６．まったく、そう（負け犬だとは)、思わない」人が大多数であるのにたいして、大学兄姉がいるひとは、そのような「最強度の否定」がかなり減少している。

じつは、この大学兄姉の有無は、ある学生の発案によるまったく別の仮説の検証のための設問であった。しかし、期せずして、大学出の兄姉がいる学生といない学生では、「負け犬」否定の強さが非常に違うことが見出せた。もっとも自然な解釈（説明仮説）は、大学出の兄姉がいない学生はアイデアリスティックに「負け犬」を否定していたのだが、大学出の兄姉という「実例」を目の当たりにしている学生は、そのようなアイデアリスティックな絶対否定の強さが弱まった、というものだろう。今回は、「兄姉」できいたが、「姉」だけできいたとしたらさらに違いが鮮明にでたかもしれない。こんご追調査の際に、ぜひ確認してみたい。

【既婚女性における相関】

以上は、回収サンプルにおける女性全体においてみられた相関であった。既述のとおり、今回の調査は、小規模（二段階）のスノーボール（雪だるま）調査であった。すなわち、授業に参加して

いる学生たちが、まずは周りの学生たちにアンケート用紙を（各二通）配布し、アンケート用紙をもらった人たち（多くは学生）は、まず一通に回答し、もう一通を、自分の知り合いに配布し回答してもらい回収する、という二段階の配布・回答・回収システムをとった。

今回は、とくに、学生さんの実の親御さんに配布し、回答してもらうようにおねがいした。（もちろん、自宅生（実家生）でない学生もいるので、実の親御さんにわたすのが困難なかたもいた、その場合は、血縁でなくてもいいから、社会人のひとにおねがいするように指示してあった）。

また親御さんのなかでも、父親はなかなか回答いただけないので、はじめから、優先順位として、「まずは実の母親」「つぎに、実の父親」、、、というように指定しておいた。

このようにスノーボール調査の「第二段階」のサンプル・回答者・データを、以下本稿では「被紹介者」と呼ぶことにしよう。

以上のような事情で回収したデータであったので、「負け犬」の問題意識にとって重要な、三十代女性のサンプルはほとんどとれなかった。この点非常に残念であり、また、今後の課題としたい（今回のような大学の授業の一環としての調査ではなかなかむずかしいかもしれない）。

それでもなかなか興味深い相関がいくつかみいだされたので、紹介してみよう。

【被紹介者・女性・既婚の分析】

被紹介者のデータは男性がすくなかったので、はじめから、女性にしぼって分析してみよう。また、未婚者もおおくなかったので、この点からも、、既婚者にしぼって分析してみる。すなわち、以下は「被紹介者・女性・既婚者」のみのデータの分析である。

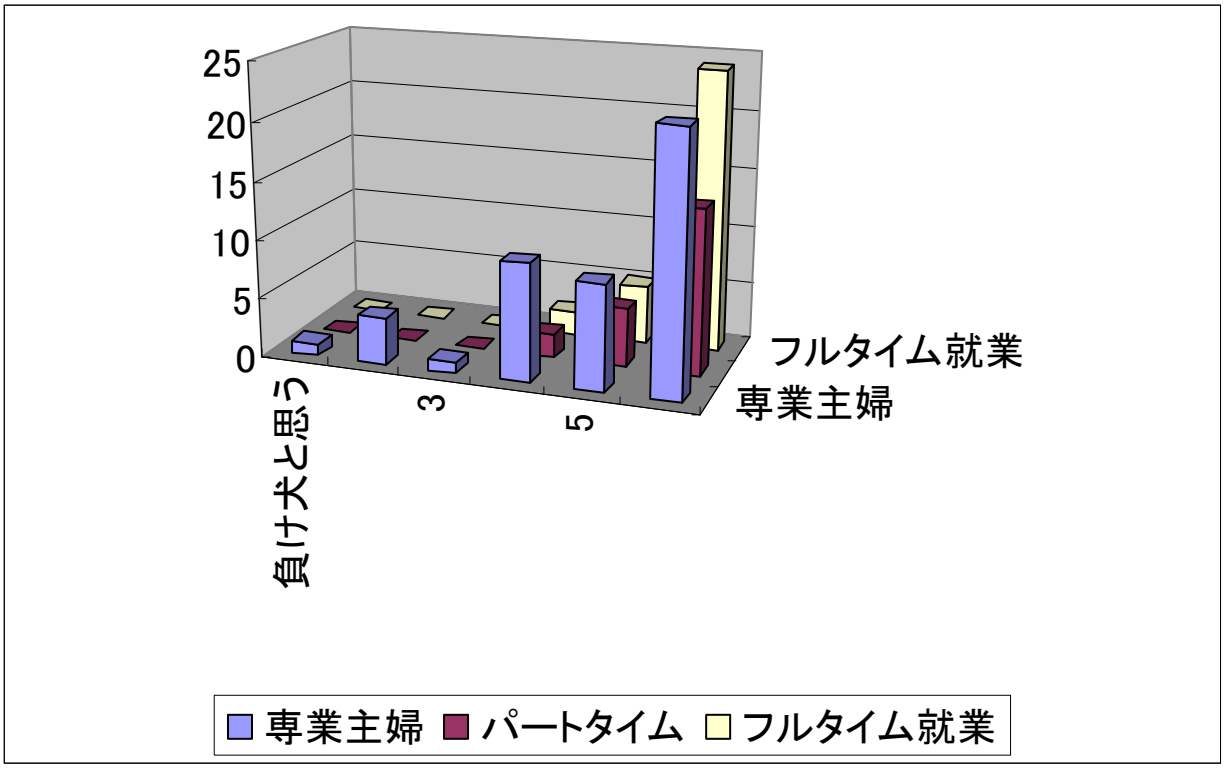
相関係数

			ai負け犬	ar母職	as多様な働き	anじつは男女差別	ab自信	ad美人
Kendallのタウb	ai負け犬	相関係数	1.000	.291(**)	.153(*)	−.156(*)	−.148(*)	−.16
		有意確率（片側）	.	.001	.038	.036	.045	.
		N	99	99	98	97	99	
	ar母職	相関係数	.291(**)	1.000	.170(*)	.090	−.159(*)	.
		有意確率（片側）	.001	.	.025	.151	.035	.
		N	99	99	98	97	99	
	as多様な働き	相関係数	.153(*)	.170(*)	1.000	.069	.059	.15
		有意確率（片側）	.038	.025	.	.202	.240	.
		N	98	98	98	96	98	
	anじつは男女差別	相関係数	−.156(*)	.090	.069	1.000	.131	.14
		有意確率（片側）	.036	.151	.202	.	.058	.
		N	97	97	96	97	97	
	ab自信	相関係数	−.148(*)	−.159(*)	.059	.131	1.000	.385
		有意確率（片側）	.045	.035	.240	.058	.	.
		N	99	99	98	97	99	
	ad美人	相関係数	−.167(*)	.049	.155(*)	.141(*)	.385(**)	1.
		有意確率（片側）	.027	.288	.031	.046	.000	
		N	98	98	97	96	98	

** 相関は、1％ 水準でで有意となります（片側）。

* 相関は、5％ 水準で有意となります（片側）。

まず、「母職」（「あなたのお母様はお仕事をお持ちです（でした）か。５．フルタイム就業。４．パートタイム。　３．専業主婦」と、かなりつよい正の相関である。



上図はとおりの分布であるが、むしろ、自分の母親が「専業主婦」だった人たちの分布に着目すると興味深いかもしれない。「母親が専業主婦」だったひとでも、当然、「負け犬否定派（図の回答枝 4 以上)」が大多数である。が、他の二カテゴリーの女性たちとくらべると、「否定」の度合いがよわまっている。またごく少数であるが、「負け犬肯定（「負け犬」とおもう)」ひとも存在する。

次に、「多様な働き」志向と正の相関である。これは、ライフスタイルの多様性を志向するひとほど、非婚のライフスタイルをも許容することになろうから、自然な帰結といえるだろう。

「じつは男女差別」と負の相関であった。これは非常に興味深い。まず、設問文と回答枝文を確認しておこう。「「いままで、とくに男女差別でないと思われてきた領域の多くで、じつは男女差別的なことが多い」というような主張をするような意見もあるようですが、あなたは、どう、かんじますか。６．とても、賛同する。ぜひ、隠されていた男女差別を暴くべきだ。、、、、１．賛同できない。あまり細かいことまで詮索するのはどうかとおもう。」というものであった。

すなわち、この設問ならびに、回答枝文は、男女差別に感受的なものであった。そのような設問回答枝を肯定するひとほど（すなわち、男女差別に感受的な人ほど)、「負け犬の否定の度合い」が「相対的に低い」のであった。

男女差別に感受的な人のほうが、現代日本においても、女性が産む性として暗黙においてであれ想定されていることにも、ヨリ感受的である、といえそうである。

さらに、のこりの二つの設問と、「負け犬」（否定）が負の相関であること、さらにまたこの「じつは男女差別」とのこり二つの設問が正の相関であることから非常に興味深い解釈をみちびきだすことができるだろう。

が、まずは、個々の相関から確認・解釈していこう。

「美人」との相関を確認しよう。設問「美人」と「負け犬（の否定）」とは、負の相関。すなわち、美人である既婚女性ほど、（三十過ぎ未婚女性を）「負け犬」とおもう、という傾向が存する。これは一見すると、既婚でありかつ自分でご自身のことを「美人」だとおもっているいわば「勝ち組」の女性が、そうでない女性をみくだしているだけにみえるかもしれない。しかし、それだけではないのではないか（以下に述べる）。

最後の相関「自信」との相関も確認しよう。これも、同様に、「負け犬（の否定）」とは、負の相関。すなわち、自信のある既婚女性ほど、（三十過ぎ未婚女性を）「負け犬」とおもう、という傾向が存する。これも一見すると、既婚でありかつ自分に自身をもっているいわば「勝ち組」の女性が、そうでない女性をみくだしているだけにみえるかもしれない。しかし、それだけではないのではないか（以下に述べる）。ちなみに、「美人」と「自信」との相関は、上表のとおり、「0.385**」となかなかつよい。

すなわち、前々段から懸案にしていた「じつは男女差別」とこの「美人」「自信」との相互連関を考えてみるべきとおもうのである。

上表の部分表にすぎないが、「負け犬（の否定）」をふくめて、計四つのみの設問での相関係数行列を確認しておこう。

相関係数

			ai負け犬	anじつは男女差別	ad美人	ab自信
Kendallのﾀｳb	ai負け犬	相関係数	1.000	−.156(*)	−.167(*)	−.148(*)
		有意確率（片側）	.	.036	.027	.045
		N	99	97	98	99
	anじつは男女差別	相関係数	−.156(*)	1.000	.141(*)	.131
		有意確率（片側）	.036	.	.046	.058
		N	97	97	96	97
	ad美人	相関係数	−.167(*)	.141(*)	1.000	.385(**)
		有意確率（片側）	.027	.046	.	.000
		N	98	96	98	98
	ab自信	相関係数	−.148(*)	.131	.385(**)	1.000
		有意確率（片側）	.045	.058	.000	.
		N	99	97	98	99

*　相関は、5％ 水準で有意となります（片側)。

**　相関は、1％ 水準でで有意となります（片側)。

上記のように、「じつは男女差別」と感じている既婚女性ほど、「負け犬」を肯定している。そして、そのような女性ほど、（あくまで相対的・比較的だが）自己に自信をもち、美人である。ここから、いわばジェンダー資本（女らしさという「資源・武器」）の高い既婚女性ほど、じつは、男女差別に感受的である、という（少なくとも男の私の視点からみると）すこしく逆説的な傾向が見出せるようにかんじられるのである。

ここからさらに思弁をたくましくすれば、以下のようなこともいえるかもしれない。すなわち、単行本『負け犬の遠吠え』のヒットは、ある種のフェミニスト的視点からすれば、反動にうつるかもしれない。すなわち、「女たるもの、ある年齢になったら、結婚して、出産して、、、、」という旧来の前提の喧伝にみえるからだ。

しかし、もしかしたら、そうでないかもしれないのである。むしろ、「男女差別」に感受的（甘受的ではなくて）な女性ほど、「負け犬」ラベリングに寛容的である。そして、すくなくとも、われわれのデータにおける既婚女性においては、彼女らは、相対的に「自信をもち」「美人」である。このように、ジェンダー資本が豊かな女性こそが、相対的に、男女差別に敏感でありつつ、ダーウィニスト的な出産選好（があったとして）に対しても感受的なのではないか？。ジェンダー資本をはじめとする社会的資源（リソース）が、それほど、高くない女性は、それに比して、現実に存在す

る男女差別に感受的でなかったり、ダーウィニスト的な出産選好を否定（抑圧）したりしがちなのではないだろうか。

いうまでもなく、以上は、たんなる、データのふるまいをもとにした思弁にすぎない。今後、この思弁自体を検証すべき仮説とするあらたな調査を設計してたしかめねばならない。しかし、今後のリサーチをすすめていくうえで、捨てるにはおしい視点であるとおもわれる。また、同様の視点は、今回の同じデータに関する別の変数（設問）にかんしても、とくにフェミニズム意識にかんしてもみいだせる。本稿につづいて、次稿で、その点をぜひ論じてみるつもりである。

【言説社会学的分析】

以上、『負け犬の遠吠え』について、ダーウィニアン社会学の視点ならびに、とくにその視点とわれわれ自身の調査結果の関連からみえてきたことをのべてきた。しかし、本書に関しては、どうしてももう一点言及しておきたいことがある。それは、いわば、言説社会学的分析によるものである。それは、本書における第二のキーワード「イヤ汁」の効果である。

【「イヤ汁」】

本書の第一のキーワードは、いうまでもない「負け犬」である。本書がこれほどまでに現代日本のひとびとに喧伝された理由のひとつは、キーワードセッティングのたくみさがあるだろう。著者酒井順子はこのような「トラのシッポをふんでしまうようなキーワード」案出に非常な才があるように感じられる。

そのような本書において、いまのところはあまり喧伝されていない、そして、さっと一読するだけでは読み落としてしまうような、それでいて、潜在意識？にのこって、読者にボディーブローのようにじわりじわりときいて、不可逆的な効果をのこしてしまうような、そのようなもう一つのキーワードがある。それが「イヤ汁」である。

このキーワードは、「負け犬」たちが、和風趣味やさまざまな趣味に「はまって」いることの記述をめぐって初出する。

「で、その手の性質の人が趣味を持つと、どんなことになるか。・・・・・と考えると、「とことんのめり込む」ようになることは、火を見るより明らか。（中略）
私は、その手の人々が集っているところを遠巻きに見ていると、なにかイヤーな汁、略していや汁、がその集団から滴っているように感じずにはいられません。（酒井 2003:113）」

　では、そのような「イヤ汁」はなぜ生ずるのか。舞踏アディクション（依存）をめぐって、著者（酒井）は言う。

「負け犬はなぜ、踊るのか。・・・・というと何かが溜まっているから、なのでしょう。本来であれば出産や子育てに使うべきなのであろうエネルギーの玉のようなものが、負け犬の肉体の中では、使われずにうずいている。その玉をおとなしくさせるために、彼女達は腰をくねらせ、肩をゆすらずにはいられないのだと思う。（酒井 2003:115）」

「和風であれ、踊りであれ、旅であれ、手芸であれ、それぞれのアディクション症状からは、それぞれ違った臭いのイヤ汁がでています。和風趣味に走った負け犬の、イマイチ趣味の良くない安手の着物をゆるい着付けで着ている姿から垂れる、ちょっと貧乏臭いイヤ汁。（略）おっかけに熱中する人からしたたる、モテなかった過去というものが煮詰まってできたようなイヤ汁。舞踏アディクションの人は汗と共にイヤ汁をも流し、（略）そして手芸アディクションの人は、ひと針ひと針、イヤ汁のステッチを布の上に残していくのです。（酒井 2003:117）」

　このような現象を「イヤ汁」と呼ぶべきかどうかはとにかく、このような諸現象が生じうることも、ダーウィニストの視点からもありそうなことだろう。有性生物にとっては、出産はおおきなタスク（仕事・課題）だろう。そして、ある種の動物にとっては、育児もまたおおきなタスク（仕事・課題）だろう。そのような大きなタスクをパスしている同年代の生物に、ついやすべきエネルギーとでも呼ぶべきものが「たまって」しまっているのはありそうなことだろう。

「イヤ汁とは、欲求不満とかあがきとか言い訳とか嫉妬といったものがドロドロに混ざった上で発酵することによって滴るものなのだと思います。（酒井 2003:117）」

　そして、その種の「たまってしまっていたものの発散」が、ある種の多数派の者たち（出産し、育児をしているがゆえに、それが「たまって」いないひとたち）からは、一種の臭気として直感されることもありうることだろう。

　といういわけで、このイヤ汁のコンセプトは非常に興味深い。しかし、いうまでもなく、ここでは、著者酒井独特の（お得意の）直感的発見にとどまる。われわれダーウィニアン生物学に依拠した社会学者としては、これらをあくまで、仮説発想の機縁として、反証可能な経験科学的な仮説命題へと展開させていきたい。

　また、著者酒井へのありうべき非難をもひとつはらっておきたい。著者酒井は、このような「イヤ汁」現象を、発見・感受する。のだが、それはかならずしも、「負け犬」をおとしめることにはつながらない。

彼女（酒井）は、「アディクションからくるイヤ汁のたれ流し症状はしかし、別に恥じるものではないような気もするのです。（酒井 2003:119）」という。彼女によると、「結婚して子供を産んだ人というのは、いわば「子育てアディクション」（酒井 2003:120）」だという。イヤ汁をだしているのは、なにも「負け犬」だけではない。子育てで周囲がみえなくなっている人からも、「子育てアディクションを原因とするイヤ汁が出ている（酒井 2003:120）」という。既婚女性は、「他にすることが無い」から、「「愛」「母性」という言葉を頼りに」子供を産み育てるという。

「八十五年という長い人生の暇を潰すために、人はそれぞれの依存対象を見つけているのであって、「依存に貴賤なし」と私は言いたい。（略）私自身も、独身者にたいしても既婚者に対しても、
「げーっ、あの人イヤ汁だしてるっ！」
と、我が身を棚に上げまくった差別発言をしないように、心がけたいものだとは思っているのですが。（酒井 2003:120）」

このように、「イヤ汁」は既婚者でもありうること。独身者・既婚者を通じて「イヤ汁」それぞれになんらかの価値評価を持ち込んで差別することに自分（酒井）は警戒的であることを述べている。

【「イヤ汁」のディスクール・メカニックス】

とはいえ私（筆者・桜井）は、本論文の最後で、この「イヤ汁」という言葉のある種の危険性、ないし、副作用（の危険性）について、どうしても言及したい。
それは、この「イヤ汁」という言葉がもってしまう言説的仕掛け（ディスクール・メカニックス）をめぐってのものである。

それはすこし複雑なメカニズムである。

すなわち、この「イヤ汁」が非常に直感喚起的かつ反証困難であるがゆえに、「負け犬」のひとがどんなに平気で、あることに熱中していたとしても、「ほーら、イヤ汁がたれてるたれてる、、、」と揶揄されてしまう可能性があることがまずは第一段階である。

これは、かつて江原由美子(1985)が指摘した「からかいの政治（学）」と少し似ている。人が性差別的な状況でその差別的状況を指弾しても、多数派には、その指弾を「からかう」という非常に強力な対抗方略が存在する。ある性差別的な振る舞いをそうであると指弾した場合に、（いまどきこんなことはないと私は期待するが）「男性にもてない女性ほど、ひがんで、セクハラセクハラって、さわぐんだよねぇ」などと対抗される。いうまでもなく、この発話には、ダブルバインド的なトラップ（わな）が仕掛けられいる。すなわち、まずは、この発話を「肯定」はできない（＊）。しかし、また「否定」したとしても、「ほーら、ひがんでるひがんでる、、、」と、この発話の内容に遂行的に

（あたかも遂行的には肯定しているかのように）からめとられてしまう。この発話に対抗するには、言語行為の言及レベルの多層性を逆手に取ったようなより高度な対応が必要だろう。

同様な効果を、「イヤ汁」はもってしまうだろう。「わたしは、イヤ汁なんか、たらしていません！」とでもいいたげな振る舞い自体が、「そんなにがんばって、否定して、、、。そのがんばり自体から、ほーら、イヤ汁たれてる、たれてる、、、、」という揶揄を導いてしまうだろう。

慧眼な読者はすでにお気づきかもしれない。著者酒井のスタンスは、いわば、上記（＊）で述べたような一見「まずは、「肯定」はできない」ようにみえるトラップ（わな）的状況で、「それを肯定してしまおう」、という方略だともいえるだろう。すなわち、「私は、負け犬なんかじゃありません！」と否定せずに、「はい。負け犬ですが、それが、なにか？」というように(酒井 2004)。「はい。イヤ汁たらしてますが、それが、なにか？」とでもいう方略だろう。

私が述べたいのは、さらに第二段階がある。すなわち、このような「イヤ汁」がもつトラップ性が、「負け犬」の女性たちをいわば意固地にさせてしまうのではないかという懸念である。この点、二つのキーワード「負け犬」と「イヤ汁」には、若干の効果上の「種差（同類性と差異）」とがあると私には感じられる。すなわち、「負け犬」は上記の「肯定的居直り」が比較的容易である（とおもう）。それにたいして、「イヤ汁」は比較して肯定的居直りが容易でない（とおもう）。

本論文の冒頭で、私（筆者）は、本書『負け犬の遠吠え』が、現代日本における晩婚化・少子化トレンドのいくらかなりとものターニングポイントであるかもしれない、とのべた。しかし、本書の第二のキーワード「イヤ汁」は、これに対してマイナスに作用しうるとおもう。すなわち、みずからの婚姻選好・出産選好を自覚しかけた独身女性を、意固地にさせてしまい、その両者（婚姻選好・出産選好）を否認（抑圧）することにもつながりうるからである。

その意味で、本書『負け犬の遠吠え』は、二重に仕掛けられている（著者が自覚して仕掛けているといっているわけではない）、といいうるかもしれない。

【「話題の社会現象」と理論・実証社会学とのコラボレーションにむけて／社会学内ポリティカルコレクトネスの対自化にむけて】

以上、昨今のベストセラー・話題書『負け犬の遠吠え』をめぐって、われわれの社会学的立場ダーウィニアン社会学ならびにそれ以外の視点から、理論的・実証的に検討をくわえてみた。『負け犬の遠吠え』という本をめぐる現象自体がごく最近の現象であること、また、分析につかった調査は、本現象をメインターゲットにするものではなかったこと、そしてもちろん、私の能力不足などから、ごく端緒的な分析にとどまってしまったかとおもう。そのため、読者にあっては、「ハイ。ハヤリの

現象を、サラッと論じた、ありがちな「社会学的エッセイ」ね。」と本論文を評価するむきもいるかもしれない。達成レベルとしてはそのように評価されても、私（筆者）としては、反論できない。

しかし、志向はそれにどどまるものでないつもりだということをのべておきたい。とくに二点のべておきたい。

第一は、「話題の社会現象」と理論・実証社会学とのコラボレーションをめぐってである。現代社会で話題にのぼる社会現象については、当然、社会学者にも意見表明がもとめられる場合がある。そして、自戒も込めていうのだが、それのような意見希求にたいして、あまりに瞬時に社会学者が返答（レスポンス）することが多すぎるのではないだろうか。たとえば、新聞からある現象・事件に「コメント」をもとめられて、即座にあるいはせいぜい次の日にコメントをかえさねばならないときがおおい。社会は、即座のコメントをもとめているのであるから、またその種の時間感覚の「ジャーナリズム」にも「参加」しておかないと「発言権を失う」こともおおいので、これはこれである程度しかたないことであるかともおもう。しかし、この種の「即座のコメント」には社会学者としての理論的実証的蓄積（があったとして）を生かせないことが多い。

他方でまた、「この種のジャーナリズム」とはかなり無縁に、理論的実証的蓄積を積み上げている社会学（者）もおおい。それはそれで、わるいことではない。しかし、「話題の現象」はそれはそれなりに、現代社会の「なにか」を示している蓋然性が高いだろう。それを、「いそがしい、日刊的ジャーナリズム」とはちがった時間スケールで、そして、また既存の社会学的理論的実証的蓄積をいかして、分析することはのぞましいだろう。本論文は、そのような方向性の試みの端緒のつもりである。

第二は、社会学内ポリティカリーコレクトレスの対自化である。社会学者の集団も当然一つの社会であるから、それなりの暗黙の常識や価値観をもっている。とくに、現代日本社会において、社会学者になろうとするような人たちにはある種の傾向性があると思われる。すくなくとも、ランダムサンプリングされた集団のように、社会学者社会が、全体社会の、統計学的な意味での縮図になっていることはおそらくないだろう。

したがって、社会学者社会においても、いいやすいこと、いいにくいこと、とおりやすいこと、とおりにくいこと、がある。そしてまた、それは、全体社会のそれらと多少なりとも傾向がことなることがありそうなことだろう。

たとえば、性別（いわゆる「ジェンダー」）に関することについて、意識が高いように感じられる。意識が高いことはとくにわるいことではないとおもうが、それにともなって、性別にかんして、いいやすいこと、いいにくいこと、とおりやすいこと、とおりにくいこと、など、が存在し、しかもそれは、全体社会のそれらと、少なからず傾向がことなると感じられる。

たとえば、三十代独身女性を「負け犬」と呼ぶような本が話題にのぼっているということを話題するようなことさえいくらかでも忌避するような傾向があるかもしれない。本論文で、あえて、そ

のような書籍をテーマとしたのは、このような社会学者社会にもあるように感じられるある種のポリティカリーコレクトネスのバイアスを対自化することをめざしたつもりでもある。

【文献】

江原由美子　1985　『女性解放という思想』　勁草書房
酒井順子　2003　『負け犬の遠吠え』　講談社
酒井順子　2004　Yahoo!ブックス　インタビュー・立ち読み ＞ 酒井順子　（2004 年 2 月 4 日掲載）
http://books.yahoo.co.jp/featured/interview/20040204sakai/01.html

【謝辞】

アンケートに協力・参加いただいたみなさんに、感謝いたします。
鹿児島大学で行った公開セミナー「『負け犬の遠吠え』をめぐって」での議論に刺激をうけました。
ご参加のみなさんに、感謝いたします。

さくらい　よしお
Sakurai.yoshio@nifty.com
http://homepage3.nifty.com/sakuraiyoshio/